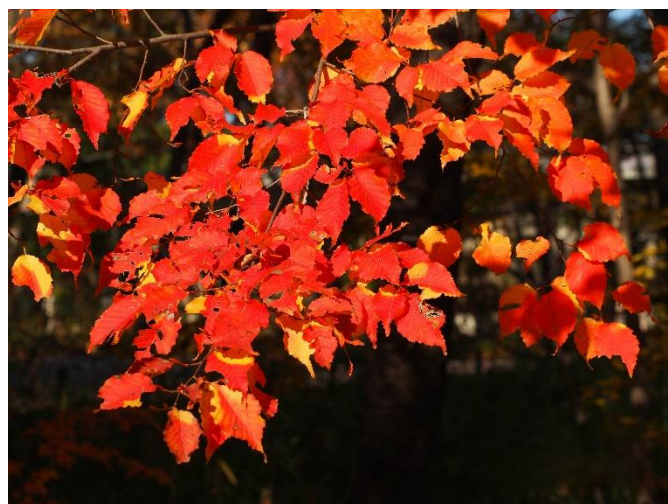


シデの果実ができるまで

学習園ではアカシデ、イヌシデ、クマシデの3種類のシデ属の仲間が植栽されています。「シデ」の名はこれらの果実がしめ縄等に垂らす紙垂(しで)に似ていることから名付けられています。種によって多少好みの環境は異なりますが、どの種も平地の雑木林から山地で見られます。

今回はアカシデの果実ができるまでを見ていきたいと思います。



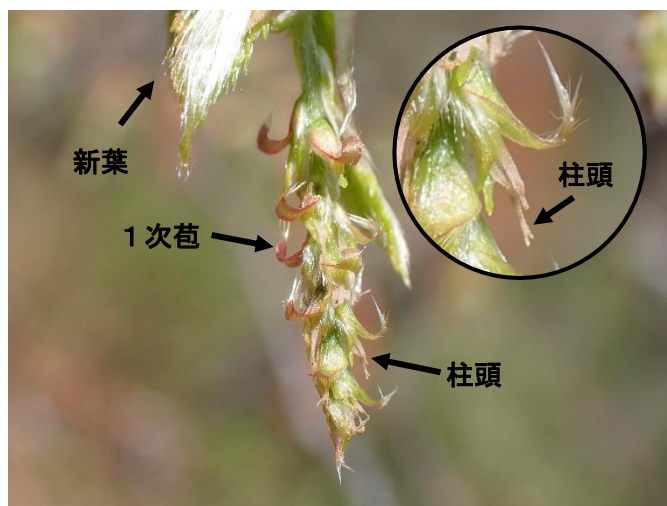
紅葉したアカシデ(11月下旬)



アカシデはカバノキ科というグループに属し、同じ株に雌雄別々の花を付け、4月～5月の間に新しい葉が展開すると同時に花を咲かせます。花には花弁が無く一見地味ですが、よくよく見るととても複雑怪奇な構造をしています。地味な上にあつという間に花が終わってしまうため花が咲く木としてあまり認知がないかもしれません。地味であるのは花粉が風散布であるため、訪花昆虫にアピールする必要がないからだと考えられます。尾状で垂れ下がった雄花序は、枝にたくさんつきます。雄花は1次苞^{いちじほう}と呼ばれる傘の下に3個付きます。雌花序は新しい枝に付き、葉も含まれた混芽から出てきます。雌花序の1次苞には毛が生え、1つの1次苞につき雌花が2個付きます。



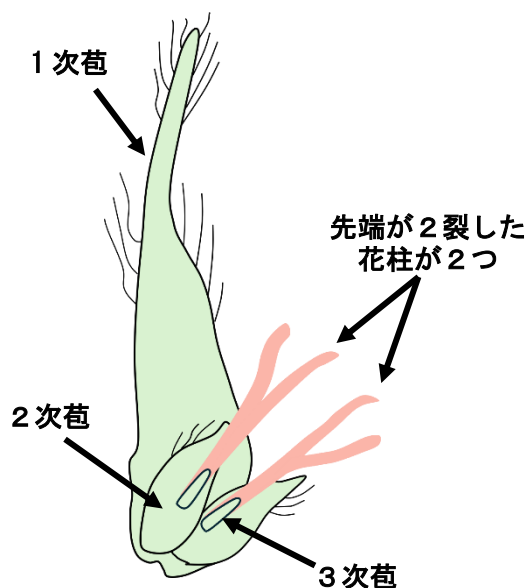
アカシデの雄花序



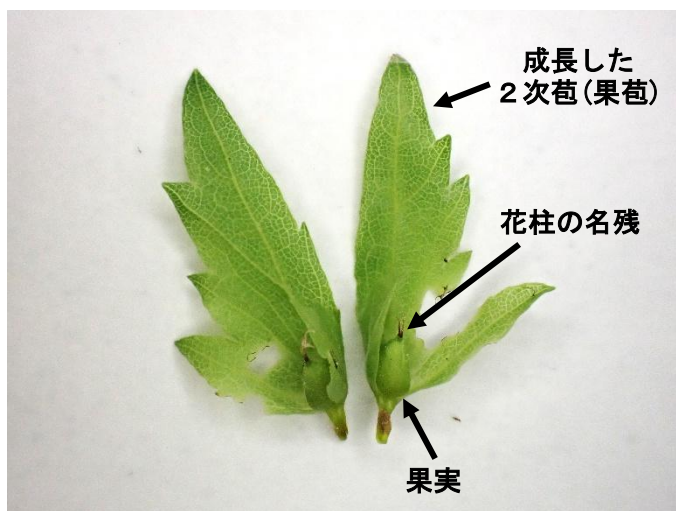
アカシデの雌花序 (柱頭は2裂する)

～雌花から果実へ～

ここからは果実ができる雌花の構造の図解です。雌花を包む苞は1次苞～3次苞の3つがあり、苞には細かい毛が生えています。1つの1次苞には2つの雌花が付き、花柱の先端は2裂しています。それぞれの花柱の基部を包むように2次苞が1つずつつきます。そして更に花柱の根元に3次苞がつきます。2次苞と3次苞は特に小さく、肉眼ではまず見えません。これが結実し、果実の成長が始まると共に2次苞と3次苞は合着し、伸長します。合着した苞は果実を包む「果苞」となります。



1つの雌花の図



早期に脱落した果穂から採取した若い果実

左の写真は早期に脱落した若い果実です。果実は1つの1次苞に2つ対になって付きます。果実が成長し始めるとじきに1次苞が脱落します。そして前述した通り果実の成長と共に2次苞も成長し、葉状の果苞となります。3次苞の痕跡は見当たらず、どこにあたる部位なのかよく分かりませんでした。そしてこの果苞が翼となり風を受けることで果実が遠くに散布されます。カエデの果実にある翼と同じ働きですね。(カエデ類の翼は果皮が由来)

～身近な不思議～

今回は何かきっかけでも無い限り調べようとも思えないシデの花の構造についてご紹介しました。シデの木は身近にありますが、花が目立たないということもあり、知らなかった！という方もいらっしゃるのではないのでしょうか。意外とまだまだ身近に不思議は潜んでいるかもしれませんね。



成熟したアカシデの果穂